**第３回大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会緑整備部会記録《要旨》**

○日時　　平成２６年１０月３１日（金）　１５：００～１７：００

○場所　　大阪府日本万国博覧会記念公園事務所　第１応接室

（吹田市千里万博公園１－１　万博記念ビル４階）

○議題　「万博記念公園将来ビジョン（仮称）」について

○出席委員等　　石川部会長、篠﨑委員（５０音順）

尼﨑専門委員、甲谷専門委員、養父専門委員、山本専門委員（５０音順）

○事務局　　府民文化部理事　ほか

**【開会】**

＜審議会規則第５条第２項の規定により、会議の成立を報告＞

＜府民文化部理事挨拶＞

**【議事】**

＜事務局より配布資料の説明＞

**石川部会長**

ご説明ありがとうございました、それでは、委員の皆さま、ご審議をお願いいたします。

**養父専門委員**

「資料２」のＰ６をご覧いただきたい。

密生林と疎生林で整理され、その中で階層構造があるわけだが、それを解決する方法と　して、ギャップ工法や萌芽更新などが挙げられている。私は、現地を拝見させていた　　　だいたが、これでは対応できないと思う。

万博公園周辺には種子の供給源がない。いくらギャップを造っても、公園として植えた　ものがそこに入り込むことはあっても、園内やその周辺にあるもの（樹種）が出てくるだけ。今まで私が携わってきた現場ではなかった。通常は、現状に対して質のよい表土を　　いただいてきて、そこの構成種を早い目に居つかせる。階層構造は植物が自ら造っていく。人間が造ってもかなうわけない。植物の力に任せてうまい具合に進んでいくというのが、植生遷移の過程。人の力で階層構造を造るというのは非常に難しい。限られた周囲だけを造ることになる。

本来の万博公園周辺の潜在性植生からいうと、近くの質の良いところから表土を採って　くる。これは大原則。

我々は、１０年、２０年、３０年のような短期でしか森を見ない。

森の世界は、そのような短期では動いていない。１００年、２００年はざらで、　　　　３００年オーダーで動いている。多少手を入れても、その時間系の中で見ていくしかない。

例えば、倒木も荒れているように見えるが、これは当たり前。倒木があって、そこに　　　いろいろな生物が住み着いて、生物多様性が行われている。万博公園の森に入って　　　「ここは公園ではないのではないか」という場所があったとしても、それは密生林を想定して造り上げた森だから、それはそれでよい。そういうもの。ぜひ一度、本物を見て　　　いただきたい。

３００年、５００年経った自然の森を見ていただければわかる。一本の木が倒れたら、　　　１００メートル四方はギャップになる。そこへ周辺から新しい種が入ってきて更新して　いく。時系列も考えていただきたい。

クヌギ、コナラを中心とした落葉広葉樹へ転換していく旨記載されているが、これらは　萌芽更新で燃料を作ってきた樹種。もともと日本にあったかどうかもわからない。　　　中国大陸から持ち込んだという説もあり、自然分布していない可能性が高い。萌芽更新で森を若返らせることで生きている。切らなければならない樹木。その辺りを整理して　　いただかなければならない。このままやってもそうならない。

鹿児島大学農学部では、平成２、３年にカシナラクリムシが発生した。現在は、　　　　治まってきている。食うか食われるかの営みが行われるとだんだん消えていくもの。その段階ではたくさんのカシが枯れるが、それが営み。その営みを万博公園でできればよいが、それはできない。だとしたら、クヌギ、コナラを使うのは間違っている。見直しが必要。本物を見ていただくと、おわかりいただけると思う。

この素晴らしい将来ビジョンを誰が実施するのか。大阪府なのか、共同企業体なのか。　　事業者、受け皿が見えない中で、将来ビジョンを策定するのは疑問に思う。

**石川部会長**

　　ただ今、本日議論しなければならないことをご指摘いただいた。森に関しては、緑整備　　部会として、きちんと議論しなければならない。

当初から、委員の皆さまからどのような森を考えているのかという本質的なご質問が　あり、それに対して、事務局の方で「いのちを育む森」という概念を提案していただいている。部会としてこの目標でよいのか、あるいは、具体的にどうすればよいのか。

また、万博公園は、山の奥の原生林ではなく、たくさんの人が来るところ。そのような　　現状を見た上で「これなら」という着地点のようなものを、本日議論させていただきたい。

**尼﨑専門委員**

万博公園は人が造ってきた森。現在の森の整備計画においても、時系列を考えつつ、　　森の質の違いや利用形態も考えて策定されたと思う。それが、これまでどう移り変わってきたのか検証が必要。そうするとこの森の性格が見えてくる。その辺りが、まだわかり　　にくい。

私は、当初の筋書きどおり推移できていないのではないかと考える。実態が知りたい。

**事務局**

これまで、密生林を中心とした３０ヘクタールを５年に分けて調査してきた。１本１本の木について直径、樹高を測り、５年後どうなっているのか、といった成長状況把握を　　行ってきた。

**尼﨑専門委員**

Ｐ７に「森の目標像（案）」の簡素化された図がある。常緑樹が成長し一定の競争が　　　　起こり、その間に落葉樹も入ってくるとされているが、これでよいということなのか。

**事務局**

このような遷移を行うというイメージを表現した図。

**尼﨑専門委員**

自然遷移に任せておけばだめで、密度管理をする必要があるという判断があるという　ことなのか。

**事務局**

現在、９００本であれば、１００年後には１００本から２００本の密度になるという　こと。植栽から１００年後には、人為的な作業が入ってくるところもあれば、自然淘汰　　される部分もある。

**尼﨑専門委員**

自然淘汰ではうっとうしいので、少し手を入れましょうか。ということなのか。

**事務局**

長期で考えると、そういうところもあるし、自然の遷移の中に任せるという部分の　　作り方も必要であると考える。万博公園の立ち位置、来園者からどう見られるのか、　　　というところを考えて方向性を出す必要がある。

**養父専門委員**

ギャップを造ったところで、園内にあるものか、公園周辺にある樹種しかこない。

ここは公園なので、皆さんが使用できるようなスタイルにすべき。資料に書かれている　工法ではできない。ギャップは１０年すると元どおりになる。高木層、低木層などを構成　　する種がない。種を持ってこなければできない。そうしなければ、いつまでたっても単層の森のまま。これまでの様々な研究により結果が出ている。ギャップ工法や萌芽更新だけではなく、新しい種を入れなければ、階層構造はできない。

**事務局**

公園外周部の森であるが、１辺１５メートルの正方形で伐採して、その部分に彩都や　　箕面森町といった、開発が行われている地域からもらってきた表土を入れている。

**養父専門委員**

それは、手の入った表土。比較的質の高い常葉樹林の表土をお持ちになっている神社　などからいただいてきて使わざるを得ない。

**尼﨑専門委員**

今は、目標像に関する議論を行うべき。

**石川部会長**

Ｐ７の図は、あまりにも貧弱。現在からいきなり１００年後の目標像というのは　　　　飛躍しすぎ。２０年後がよいのか３０年後がよいのかは、養父専門委員にご相談いただき　たい。遷移や土壌の話も同様。

万博公園の森として目指すべきものが資料のとおりでよいのか、ご意見をいただきたい。

**山本専門委員**

Ｐ６に「貴重種の森」という記載があるが、定義が不明。オオタカが営巣できるように　　確保するとも解釈できる。ご説明いただきたい。

**事務局**

自然文化園には水鳥の池がある。この辺り一帯は、生物が生息しやすい生物中心の環境を整える。人間は邪魔しないという位置付けの森。

一方、活動については、森の空中観察路「ソラード」の周辺で楽しんでいただくという　　区分。はっきりと区分することは難しいが、概ねこのような区分を考えている。

**山本専門委員**

植物的な貴重種を保全するとなると、２．７ヘクタールという規模は適切なのか。森と　　して担保するには少ないのではないか。これまでオオタカも来ていたというところから　　判断されたのであろうが、もう少しスケールが必要ではないか。

**石川部会長**

オオタカの生息は、公園全体が支えていると言ってもよい。貴重種の森が２．７　　　　ヘクタールというのはお話にならないし、あえてそのような表現をする必要はないのではないか。

**養父専門委員**

書かない方がよい。２．７ヘクタールしか守れないのかと思われてしまう。万博公園　　全体について生物多様性の森づくりをやっているという体裁の方がよい。

**甲谷専門委員**

Ｐ３からＰ５にかけて、森、緑、公園という言葉が出てきているが、これらの使い方が　　不明確。

基本は公園。公園の中で、森については「自立した森」として育てていこうというお話であるが、養父専門委員のお話では、山の中の森は３００年オーダー。でも、資料では、森の育成だけど芝生を維持するとされている。この辺りが混乱していないか。ご説明を　お願いしたい。

**事務局**

Ｐ３に記載している公園のイメージは、全体の緑、芝生も含めた緑。本府では、親水　　空間も含めた場合「みどり」を使用しているが、資料では芝生も含め「緑」で位置付け　　　している。また、その中の森林については「森」という表現を使用している。

**甲谷専門委員**

何百年オーダーという森ではなく、人間が手を入れて１００年オーダー位で管理して　いくようなものを「森」、芝生や水も含めて「緑」と定義するのですね。わかりました。

しかし、資料を見てもその辺りが不明確。

**事務局**

整理します。

**石川部会長**

人間が手を入れて１００年オーダーということだが、志としては、２００年、３００年　　と続く森と考える。明治神宮にも人が入らないエリアがあり、様々な生物が生息している。万博公園には素晴らしい森がある。意図的にそのような場所があってもよいのではないか。

**篠﨑専門委員**

万博公園は非常に広大。動線の問題として、人がたくさんいるところと人が入らない　　ところが出てくる。

「すでに様々な樹木や生物が育っている森」という発想で資料作成されている。現状、　　自然文化園地区の西側は奥まっている。人はあまり入らないが、貴重種が生息する森に　　これから造り替えていくというような動線や、人々の利用の観点から発想していけば　　どうか。

森や木の密度は書かれているが、人の密度が書かれてない。歩いて行けないところには　人も入らない。そのようなところに貴重種の森を造るということもできるのではないか。

**甲谷専門委員**

共同企業体は、園内の拠点でイベントを実施して集客を行う旨提案されているが、公園　全体を回遊するのに上津道などに交通手段があってしかるべきだし、拠点をつなぐことで　イベントの開催ができる。その辺りをもう少し検討する必要があるのではないか。

**山本専門委員**

万博公園で一番人が集まるところは、来年秋オープン予定の複合型エンターテイメント　施設となるはず。当該施設と自然文化園地区をどのようにつなげるのか、資料上では　　不明確。当該施設を訪れた人をどのようにして自然文化園地区に引き込むのか。あるいは、

その逆はどうするのか。それがなければ、その周辺施設の連携はあり得ない。

**事務局**

現在、園内の移動手段として、「森のトレイン」が自然文化園地区の西側エリアを中心に運行されている。閑散期には運休しているが、運行エリア内の主要な施設への移動と　しては担保されていると考えている。

日本庭園前駐車場付近まで運行ルートを延長すると、行楽シーズンには人が溢れかえる中を運行することとなり、非常に危険。検討は行ったものの課題が多い。自然文化園地区全体の移動手段については、企業の実験などを踏まえ検討してまいりたい。

資料Ｐ２１に記載している移動手段は、委員の皆さまに議論していただくため、主要な　動線について、図面としてお示ししたもの。

**尼﨑専門委員**

動線の検討は非常に重要であるが、人の密度の実態がわからないため理解しがたい。

万博公園には、自然観察学習館という非常にレベルの高い施設がある。子供たちが、　　自然観察をしながら、自分なりの発想で新たな魅力を見つけていくという、素晴らしい　プログラムが構築されている。それは、自然の遷移に任せるというバックヤードがあって、　　　どのような森がよいのかという考えのもとに作られたものだと思う。そのようなつながりを明確にしていきながら、現状はこうだから、このように取り組んで、将来的には　　　　こうしていくという、立体構造で示していただきたい。森の遷移だけで議論すると、　　　その方向だけに話が進んで、論理が分離していく。

そのあたりをうまく融合させ、人の利用を考えた森づくりの計画があって、それが　　　変わって手を加えていこうとしているのか、そのようなストーリーが見える資料を　　　いただければ分かりやすい。

**篠﨑専門委員**

商業施設における人の歩行距離は、７００から８００メートルとされていたものが、　最近では３００メートルしか歩かないらしい。動線の検討は非常に重要。

目的のある人以外、人があまり入らないという限定したエリアについては、手を加え　ない。人間が希少だから、逆に自然を回復させるというエリアがあってもよい。

**石川部会長**

面積が８００ヘクタールもあるパリのブローニュの森では、インフォメーションで　　パスポートを預けると、自転車を貸してもらえる。園内には自転車が走行できる道が整備されていて、若い人や外国人観光客が楽しんでおられる。万博公園においても、混雑時には実施しないといったルール作りは必要かと思うが、検討の余地はあるのではないか。

**尼﨑専門委員**

シンボルゾーンについては、案にこれまで議論されてきたことが反映されており、これでよいと思う。

しかし、日本庭園は、その匂いを感じながら何かを共有する場としても機能することを　目指した魅力向上について、もう少し議論すべきではないか。

**山本専門委員**

シンボルゾーン、軸をどうするのかは非常に重要。現在ある駐車場をどこへ移設する　のかという課題はあるが、例えば、繁忙期だけ駐車場として活用し、普段は形態的に軸が通っているとする考え方もできる。

Ｐ１１に「園芸品種の保存と収集」という記載があるが、現在、このような取り組みは　　行われているのか。

**事務局**

日本庭園が整備された当時に植えられた梅、しょうぶ、はすといった現在ある品種を　　書いている。今後、新たな品種を入れるのかということは検討が必要。また、場所の　　　選定は慎重にしなければならない。

**山本専門委員**

その場合、苗圃スペースの確保が課題となってくる。単なる苗圃とするのではなく、　　苗を育てるところまで見せて集客を図ることも考えられるのではないか。

海外では苗圃を回るツアーもある。管理のためだけではない発想の転換も必要かと思う。

**石川部会長**

「資料３」「資料４」の位置付けについて、ご説明いただきたい。

**事務局**

「資料３」については、共同企業体からの提案を整理したもの。「資料２」のＰ２５、　　　Ｐ２６で、集約させていただいている。

「資料４」については、先ほど養父専門委員からご指摘があった、だれがこの公園を　　運営していくのかについて、検討案を記載したもの。

魅力創出部会からは、事業の継続性、ノウハウの蓄積、収益を公園づくりに還元して　　魅力を向上させるシステムづくりといったご意見をいただいている。

地方独立行政法人の導入については、政令改正を伴うためハードルが高いものと認識。

指定管理者制度については、現行制度では３～５年ごとに事業者が変わる仕組みとなっており、事業の継続性が担保されないという課題がある。

現在、大阪城公園で導入しようとされている、長期間運営を任された指定管理者が一定　投資を行いながら公園の魅力向上を行い、その中でノウハウを蓄積していくというスタ　イルの導入について、検討する必要があるのではないかと考えている。

**石川部会長**

ありがとうございました。

残りの時間は、和の文化、園芸文化の発信などについて、委員の皆さまからご意見を　　　いただきたい。

**尼﨑専門委員**

園芸文化には大きな世界がある。中途半端な言い方をしてはいけない。和の文化も同様。お茶の何とか、を並べるだけでは駄目。言葉に出すときは、日本庭園の命運をかける　　　ぐらいの覚悟でなければならないと思う。

**石川部会長**

私も、尼﨑専門委員と同じ危惧がある。資料Ｐ１１は、もっとしっかりと書かなければ　　ならない。

関東の大宮には盆栽村があり、世界からたくさんの方が来られる。「ＢＯＮＳＡＩ」は　　英語。ものすごい文化。世界からプラントハンターがやってきている。

しかし、関西には関東とは比べ物にならないくらい奥が深いものがあるのではないか。　それなのに資料の内容では寂しい。世界を前にして、万博公園はこれだと大見得をきれる　ようなものが必要。万博公園が、幕の内弁当のように「何でもありますよ」となる必要は　　ない。

**尼﨑専門委員**

盆栽村は、大正時代に盆栽業者が集団移住して形成されたと聞く。一定の期間で、　　　あれだけ世界的なものを作ったという前例がある。

**石川部会長**

盆栽村の方々は、自分たちは古い伝統ではあるが世界の先端をやっているという自負が　ある。万博公園ではどこに軸足を置くか、それが重要。

**篠﨑専門委員**

日本庭園については、バラエティをとるという方向ではなく、本物を造りだすことが　必要だが、そのようなテーマが出ていない。資料では、テーマパーク的発想になりかね　　ないような単語がちりばめられている。そうならないためには、どのエリアで採算を　　考えるのかということを、もう少し整理することが必要。

先ほど、人が来ないまばらなところがあってもよいのではないか、逆にそこで希少種が　保存できると申し上げたが、全体で採算を考えたときに商業的なところで稼ぐ。この　　エリアには人があまり来なくても、それでも価値があるところなんだ、という部分を　　持っておかなければならないのではないか。すべてテーマパーク的にやっているように　感じられる。そこの危惧を感じている。

シンガポールでガーデンズ・バイ・ザ・ベイの担当者から聞いた話だが、ガーデンの中　　には商業施設は入れない、商業施設は外でいいんだ。外で成り立つように考えている。　　あえて入れていません。とおっしゃっていた。

何でもいいから、今ある森の資源を活用しながら森のテーマパークにしようとしている気がして、「テーマパークでよいのですか」とお聞きしたい。

**甲谷専門委員**

何をするのか、どういう人がいて、どのように採算をとるのか、その辺りがようやく　　見えてきた。

本来は、モノがあってそのために必要な緑とは何か、という順番で組み立てられていくものなのに、そうなっていない。だから、議論があちこち行っていた。

具体的な取り組みがあって、それを補完できる緑のあり方に少しずつ変えて行き、　　そこへ動線をくっつけるというやり方をすれば、ビジョンとしてまとまるのではないかと思った。

**養父専門委員**

Ｐ１０で、日本庭園の「方向性」と「海外からの評価を高める」などと提案されているが、本当に書くのか。「Journal of Japanese Gardening」のトップ１０に入るのか。

実現可能なものはどれで、どこを目指すのか。できないものを書いても仕方がない。

はじめに運営主体はどこなのかとお聞きした。運営主体のないところで目標像を決めて、これは絶対やりますと言っても、採算が合わなかったら（事業者は）受けない。その辺りの整理をしていただかなければならない。

**山本専門委員**

万博公園は、何もないところから森を造ってきた。そこで人が活動する場を提供して　いるということで、目標像はどんどん変わっていくものだと思う。

その中で、我々がいろいろ知恵を出しながら目標像を作ることになるが、それもあく　までひとつの実験。大いなる実験場としての性格を持ったものだということを根底に　　持っておいた方がよいのではないか。

**石川部会長**

最後にとてもよいコメントを頂戴した。それでは、マイクを事務局にお返しします。

以　　上